

企業競争力の強化を実現する
**知的財産
マネジメント**



第3回
**研究開発のスピードと確実性を
高めていくヒントはナレッジを利用した
多角的視点からの分析にある。**

グローバル規模での企業間競争が激しさを増すなか、多くの企業では研究開発のスピードをいかに向上させるかが競争力強化における大きな課題となっています。最終回となる今回は、研究開発フェーズにおける知的財産の活用例を紹介します。

**ナレッジの効果的な利用が
研究開発の効率を向上させる**

技術革新のスピードがますます加速するなか、企業は「目まぐるしい変化に対応しつつ、同時に市場優位性を生み出すための研究開発を強化する」という難しい課題への対応を迫られています。

ところが、「個人」のスキルやアイデアを頼りに研究開発を進めると、目先の課題が優先され、目標に対する達成度や成果を生み出すまでの効率が低下したり、手戻りが発生したりといった問題が起ることが多いです。一方で、組織がもつナレッジやプロセスなどの知的財産を活用すれば、早い段階で研究開発の問題を洗い出し、その解決策や防止策を講じることができ、開発効率が高まります。さらに、異分野の社外情報を探り入れることで、これまでにない新しい発想が生まれる……といったメリットもあります。

多くの企業で導入されている問題解決の方法論の1つに、「TRIZ(トウリーズ)」と呼ばれるアイデア発想法があります。これはロシアで生まれた発想法で、日本では1990年代から製造業を中心に活用されてきました。しかし、2000年代に入ると、「TRIZは使えない」という見解が広がりました。その原因は、当時の企業が多くがTRIZのコンパニッツを採用しただけで、TRIZを有効に活用する仕組みがつかれなかったことにありました。TRIZは直面した問題を解決するた

めのアイデア出しには有効ですが、それを適用するための要因分析が不十分では本来の力を発揮しません。担当者の経験・知識によっては「課題」を取り違える場合があるからです。研究開発の問題を解決するうえで、まず、問題の根本となる要因を特定することが何より重要なのです。

**ナレッジの利用と業務をプロセス化する
『Goldfire Innovator™』**

研究開発における問題解決の要因分析から発想支援までをシステムで行える仕組みが『Goldfire Innovator™』です。

Goldfire Innovatorは、先にあげたTRIZのほか、「RCA」(問題の根本を特定するための方法論)、「FMEA」(故障・不具合を予測して防止を図る方法論)、「VE」(機能を維持しながら製品・サービスのコストを削減するための方法論)など複数にわたる問題解決の方法論を採用しています。また、社内に蓄積されている過去のナレッジや異分野の情報を活用しやすくするため、入力したキーワードから広く意味を読み取り、該当文章を抽出する「セマンテックエンジン」を搭載しています。このセマンテック技術によって、特許や技術文献の要約の自動生成や、日本語・英語相互の自動翻訳によるクロス検索なども可能になります。

Goldfire Innovatorは、すでに世界1500以上の企業で導入されており、導入企業は「研究開発にかかわる方法論

が統合されているので、複数のツールを導入するより投資効果が高い」「問題を深掘することで、これまで見過ごしていた他社権利の侵害というリスクを発見できた」など、さまざまな成果をあげています。

これまで3回にわたって、知的財産マネジメントのあり方についてお話ししてきましたが、実効的な研究開発を進めていくための知的財産マネジメントを実現するには、こつとした「ミニマクションツールで、有効な情報」を抽出して情報を必要とする部門の業務に役立っデータへと加工し、部門間の連携を円滑にすることがポイントです。知財部門は、「権利化」の視点から、技術部門は、「技術アイデア」の視点から……それぞれの専門スキルをうまく利用しあうことで、戦略的な研究開発を組織全体で進めることができるようになるからです。

(日本ユニシス)

